

大学時代に「流通革命論」に出会い、進路を大きく変える決心

八百幸商店が1958年に、埼玉県内でいち早くスーパーマーケット業態になったのは、母トモの決断です。母の「店をもっと大きくしたい」という考えに、社長だった私の祖父、清三は当時、全面的に賛成というわけではなかったようです。しかし、ここから母が持ち前の行動力を発揮してスーパーへの転身を果たしていきます。

母は群馬県前橋市にある松清がスーパーに転換して、うまくやっているのを知ると、松清を直接訪問して、事情を聞きに行きました。松清の植木英吉社長は母を快く迎えてくれたそうです。お客さん自身が店内を回って、好きなものを買うセルフサービスの将来性は大きいと、母は確信したようです。ですが、清三社長は賛成してくれるかどうか分かりませんでした。すると植木社長は小川町の八百幸を訪れてくれ、清三社長

～HISTORY～ 暮らしを変えた立役者



商人のDNA目覚める

「流通革命論」との出会い

を説得してくれました。

私は親元を離れていたため、当時の母の努力は後日、人づてに聞きました。当時の母の苦労は分かりませんでした。61年には父の莊輔が亡くなりましたので、母は1人で八百幸を経営していました。

そんな母の期待に背き、弁護士になるという目標を持つて法学部に入った私ですが、教養課程で学んだ法

しをより良くする。スーパーマーケットがその一翼を担う」というものです。当時、八百幸は本格的なスーパーに転換する大事な時期を迎えていました。母1人で頑張っているのを離れて見ている、何かできることはないかなと思っていた矢先でもありました。スーパーマーケットについて少し勉強すれば、母に説明してあげたり、業界の情報を伝えたりできるのではないかと

だと思ふようになりました。しかし、私はその決意を母にすぐには伝えられませんでした。弁護士から商人への宗旨変えをしたとは、法学部に入った手前、言えなかったのです。司法浪人も2年しました。振り返ると、怒られてもいいので自分の思いを早く伝えて許しを請うべきだったと思います。母にとっていい子でありたいという気持ちも邪魔していました。母も私は弁護士になるものだと思っていましたから。

流通革命に関する本を読んだり、勉強会に出席したりして「小売業は世の中の役に立つ、極めて重要な仕事なんだ」と率直に思います。挫折をしない人は、概して傲慢なのが多いようです。人間は挫折や失敗をして、そこから学ぶことが大切だと今は思っています。そして、司法浪人を続けていたある日、私は母に思い切って「うちに入りたい」と打ち明けました。

日経MJ 2019年4月26日掲載